

人間関係の緊張感

学校に行けない子ども達と話してまして、今の彼ら（彼女たち）の心の内を改めて垣間見たことがありましたので、少し書かせて頂きます。

生徒が学校に行けなくなると、なるべく授業に参加できるように学校側も配慮して、仲の良い友達を同じクラスにしたり、あるいは近所の同級生達を出来る限り同じクラスにしているにしても、なかなか授業に参加できないんですね。理由を聞くと、「知っている子達がいるからこそ、授業に出れないんだよなあ。」という返事が返ってくるんです。即ち、（学校に行っていないヘンな）自分のことを知っているから授業に出れない、と言うんです。ならば、どういう状態なら授業に参加できるの？って尋ねると、「全く知らない子で、しかも多くて5,6人ならいいんだよね。」と言います。自分のことをどう思っているか気にしなくてもいいから、と言うんですね。しかも、多いと気を回すのが大変だ、と言ってきます。

これまで多くの精神科医、心理学者や臨床心理士達が不登校に関して様々に研究し、いろんな書物や論文が発表されている中で、私がここで結論じみた話をするつもりは毛頭ありません。

しかし、この子ども達の言葉から、4年前（当時）静岡第一テレビから私達の下田での交流合宿の取材を受け、放映された時に、第一テレビさんが取材した浜北のダダクリニックの大野木先生（臨床心理士）の話を思い出しました。先生は、「不登校の子達は人間関係を築くのが普通の子達よりちょっと苦手なんです。」と言われたんです。人間関係を築くのがちょっと苦手だから、常日頃接する友達だとより失敗を恐れ、より強い緊張感を感じるんですね。その意味で彼ら（彼女たち）達の言葉は、決して逆説的な言い方ではないんです。

じゃあ、どうしてそうなるか？です。私は、それはやはり核家族化、少子化、そうした社会現象からくる、“人の中での揉まれ不足”では、と思うんです。三、四世代の大家族から、親子だけの小家族に。しかも、一人っ子か、きょうだいが少ない少子化になってきました。その上、学歴社会が広まり、子ども達の将来を考え、自分たち親ができなかった習い事やお稽古、（塾屋としては大変申し訳ありませんが）塾に通わせるようになりました。そのため放課後、公園で子ども達が遊んでいる姿をすっかり見なくなりました。社会のルールを学んだ子ども達の遊び集団がなくなり、いい意味で子ども社会を育んだガキ大将が生まれなくなりました。結果、子ども達は“人の中での揉まれ不足”になり、「人間関係の緊張感」を覚えるようになったように思います。こうした状況から、不登校やひきこもりは必然的に生まれた、と私達は捉えています。だから私達は交流合宿や野外体験活動を行い、同世代の仲間たちが群れ集い、大学生リーダーを含めた小さな縦社会で様々な活動をする中で、仲間たちと揉まれ、仲間社会の中で成長する子ども達を支援しています。